

魔法騎士冒険譚ルチエリールタ

【第8話】

みなぎし
すい

【人物一覧表】

ルチェリールタ（30）：騎士団長

カイン（25）：ヌノの皇太子

ギル皇帝（50）：ヌノの皇帝

チビィ：魔族

シャーザベスラ：ヌノの皇女

ニユンリン：魔族

シャーニューニダ：魔族

アルノ・ヨナ：ポストゼランガロニア

王女

ヒュール：魔族

タールク（8）（23）（28）：宵

闇騎士

オパピア（5）（20）（25）：社

長令嬢

フス（45）：社長

ニコポレルク（35）：騎士団長

バーテンダー：バーテンダー

○森の中

T「ポストゼランガロニア法国」

10人の盗賊団が、袋を持って走っている。

盗賊団A「へへ、これを買えばたんまり稼げるぜ！」

盗賊団B「はは、どんだけの金になるか、今から楽しみだな！」

会話している盗賊団に、後ろから猛スピードで走り迫るタールク（28）。

タールクのレイピアが抜かれる。

次の瞬間、盗賊団10人がうめき声をあげ、その場に倒れる。

タールク「ふう」

盗賊団C「かかったな！」

盗賊団C、草むらから飛び出し、銃を構えて発射。

タールク、レイピアを振る。キンと音を立て、銃弾が弾かれる。

タールク「一閃残光・大和撫子」

タールクの一閃。雷が迸る。

美しいボデイラインが、逆光で強調される。

盗賊団C「よ、宵闇騎士……がはっ」

○タールク自宅・居間（朝）

壁に、2人が描かれた絵が入った額縁がある。

オパピア（25）「おっはー！」

オパピア、赤い華やかなドレスに身を包み、部屋にあがりこんでくる。

タールク「おはよう。また勝手にあがりこんで。盗賊団を制圧して突き出してきたところだから疲れた」

オパピア「いいじゃん、ちっちゃい頃から一緒にお泊り会とかしてたし」

オパピア、ニッと笑う。

T「オパピア　タールク」

オパピア「まあまあ。あたしがクッキーとマカロン焼いてきたからさ、食べてよ」

オパピア、箱から焼いたクッキーを取り出して机に置く。

オパピア「あ、そうだ。ルチェリールタが魔族とセックスしたって話知ってる？」

タールク「燕石社の燕石新聞で知った。まさか、あのルチェリールタがあんなことしてるなんてな」

タールク、表情を曇らせる。

オパピア「なに、あこがれの騎士様がレズセックスなんてしてて幻滅しちゃった？」

タールク「……」

タールク、無言でクッキーを口に運ぶ。

○宿屋・個室（朝）

シャーザベスラ、チビイ、アルノ・ヨナ、部屋でくつろいでいる。

シャーザベスラ「向こうは向こうで証拠集めをやってもらうとして、僕たちもやることがある」

チビイ「どこ行くんだ？」

シャーザベスラ「宵闇騎士に会いに行くんだ」

シャーザベスラ、チビイを抱っこする。

チビイ「宵闇騎士？」

ヨナ「宵闇騎士タールク、プリマダンケ騎士団所属の超美人な騎士なのヨナ。彼女が通った後には何も残らないなんて言われてるのヨナ。あたしとか王族の護衛をしたりすることがあるすごい騎士なのヨナ」

チビイ「有名なのか？」

ヨナ「少なくともここら辺では有名なのヨナ。だから、今からタールクの家に行って協力をあおぐのヨナ」

○タールク宅前

目のないチビイが街を見渡すと、様々な機械がその体に映る。人型ロボット、歯車仕掛けのロボットなど。

シャーザベスラ「ここがタールクの家だ。もしかしたら、オパピアも来てるかもしれない」

チビィ「オパピアって？」

シャーザベスラ「城の近くに住んでる有名な
社長令嬢様さ、この国の機械開発工場を営
んでるローゼル社のね」

シャーザベスラ、ドアのインターホン
を押す。

チビィ「へえ、そうなのか」

チビィ、インターホンの前でふよふよ
浮いている。

タールク「はい……シャーザベスラさん？

どうしてここに。今はゲドン族の侵略があ
って、下手に自国を出て動くのは危険では」

シャーザベスラ「久しぶり、タールク。あが
らせてもらっていい？」

タールク「……まあ詳しくは聞かなくていい
でしょう。はい、ちょうどオパピアがお菓
子用意してますのであがってください」

タールクに招かれ、一行中へ。

○タールク宅・居間

オパピア「シャーザベスラちゃん、ヨナ王女さん、久しぶり〜！ はい、クッキーとマカロン！」

オパピア、シャーザベスラにクッキーとマカロンを渡す。

ヨナ「ありがとう、頂くのヨナ」

シャーザベスラとヨナ、受け取ってそれをほおぼる。

オパピア「え、なにこの子！ かわい〜！」

オパピア、チビイのまるいぷるぷるな体をなでなでする。

オパピア「ねね、クッキー食べて！」

と、チビイにクッキーを差し出す。

チビイ「ボク、水以外はほぼ無理だぜ。クッキー

みたいな粉っぽいやつならなおさらダメだ」

オパピア「そっか、残念」

オパピア、しゅんとする。

シャーザベスラ「この子はチビイ、僕の連れさ。だから、丁重に扱ってくれよ」

オパピア「おっけー！」

チビィ、なでなでされている。

タルク「それで、2人して何か御用でしょうか？」

ヨナ「ルチェリールタのことは知ってる？」

タルク「……ええ」

シャーザベスラ「それなんだ。僕たちは実は、とある目的があつてルチェリールタとその仲間たちと、旅をしているんだ」

タルク「なるほど……」

タルク、顎に手を当てる。

オパピア「で、それでなんでうちを尋ねに来たの？」

タルク「なるほど。私に助けて欲しいと。ルチェリールタが無罪になるように。そして、侵略者ゲドン族に協力してたつていう凶悪な魔族と、夕杜を支配してたつていう凶悪な魔族も旅の仲間」

チビィM「ニュンリンとシャーニューニダのことだ……」

シャーザベスラ「さすが察しがいいね、正解」

タールク「一緒にの記事に書いてありましたから」

シャーザベスラ「だけど……」

※ ※ ※

（フラッシュユ）

シャーザベスラ、仲間たちと船の個室で会話している。

※ ※ ※

シャーザベスラ「凶悪ってところだけは、不正解さ」

シャーザベスラ、目を細める。

タールク「あくまで無罪、そう主張するんですね」

シャーザベスラ「もちろん」

タールク「ですが、この件は一躍話題になっています。まがいものの名を冠する燕石社ですが、その情報収集力は本物、信用があります。国民全員に納得できる形で無罪を勝ち取らなければ、後遺症が残ります」

チビィ「後遺症？」

タールク「無罪になっても、よくない噂が飛び交うってこと」

タールク、チビィに手をポンと乗せる。

チビィ「そんな……」

オパピア「で、タールク。尊敬してるルチェ

リールタを助けるの？ どうすんの？」

オパピア、タールクの肩に腕を回す。

タールク「それは……」

タールク、下を向いて表情が暗くなる。

○船・個室

T「夕杜行きの船」

嵐宮芽里「行きましようか」

浮世心愛「ああ、ついたようじゃな」

芽里と心愛、扉を開けて個室の外に出る。

○夕杜王国船着き場

芽里と心愛、夕杜の景色を見回す。

芽里「心愛は、燕石社の報道についてどう思いますか？」

心愛「何者かによる策略じゃな。この情報の広がり方：：大方、例の情報屋じやろう」
芽里「心愛と同じ考えです。まあ私がその可能性を口にしたので大丈夫だとは思いますがど：：：」

○酒屋・内部

ポストゼランガロニア法国、酒場。

ヒュール、端末を見ながらワインを飲んで
いる。

バーテンダー「その最新鋭みたいな端末でここに連絡しているんだ？」

ヒュール「部下を雇い、監視カメラを至るところに仕掛けさせている。それに、俺の能力があれば秘密なんて筒抜けさ：：：」

ニヤリと笑い、携帯端末を懐にしまう。
バーテンダー「その技術、いったいどのものだ？ 気になるな」

ヒュール「だいたい500年前にゼラムという魔族がこの王に就任した。俺はゼラムの知り合いだ」

バーテンダー「知り合いなのか」

バーテンダー、グラスを拭いている。

ヒュール「ゼラムの科学力はすごく、そのおかげでこの国が発展した。それで、現在の科学力ができたってわけだな。要するにこの国の技術ってことだ」

バーテンダー「へえ」

バーテンダー、ワイン瓶がずらっと並んでいる棚を眺めている。

ヒュール「興味あるなら、情報売ってやつてもいいぞ」

バーテンダー「お前が嘘を言ってる可能性は？」

ヒュール「嘘はつかん。そうしてたら情報屋としての価値がなくなって情報を買ってくれなくなるからな」

○タールク宅・居間

チビィ以外クッキーとマカロンを食べながら、作戦会議中。

タールク「選択肢はいくつかあります。情報屋に頼ってなんとかしてもらおう、無罪にするよう証拠を集める、そしてもうひとつ…
…決闘で勝つ」

タールクの表情が陰しくなる。

チビィ「決闘で勝つ？ 闘うなんて野蛮な方法で決めんのかよ！？」

チビィ、激しくぷるぷると震える。

タールク、息を少し吸って、

タールク「この国は法律を重んじるが、決闘の制度だけは残った。ヌノも、決闘の制度があるはずだ」

チビィ「ヌノにもあるのか？ そこまでは知らなかったぜ。決闘って具体的になんだ？」

タールク「被告人または申し込みした本人が、あらかじめ指定された相手と決闘を行う。

相手に実力を示せば……相手を殺さずに降参させれば、晴れて自由の身だ。しかし、申し込みにも条件がある」

チビィ「なんだ？」

タールク「それは、被告人本人が申し込みできないという点だ。理由は、本人が申し込むと、力のある極悪人が力だけで無罪になってしまうからだ」

チビィ「なるほどな。つまりえっと……難しいすぎるぜ！」

チビィ、あたふたしている様子。

オパピア「被告人以外が、こいつはいい奴だく！ って言ってたら、被告人がいい人かもしれないよねく！ ってこと。そうしたら、向こうもそれに応えてくれる」

オパピア、マカロンを1個口に入れる。

オパピア「そのほかにも、いろいろルールを決めて、国民から反感買わないように細心の注意を払ってる」

チビィ「なるほどな！」

シャーザベスラ「……」

シャーザベスラ、タールクに視線を向
けている。

タールク「とにかく、どれにするかによって
私の今後の対応も変わってきます。どうす
るか、皆さんで決めてください」

少しの沈黙。

全員が真剣に考えているような雰囲気
になっている。

その瞬間。外からの異様な音が家の中
まで届く。

シャーザベスラ「な、なんだ？」

ヨナ「何がおこったのヨナ！？」

○タールク宅前

チビイ「な、なんだよこれ！」

4人と1匹、外に出る。

機械が暴走し、人々を襲っている。

人々は、悲鳴をあげながら逃げ回って
いる。

タールク「これは……人工知能や機械はロー
ゼル社と国によって管理されているはずで
は……」

○ローゼル社・社長室

警報が鳴り響いている。

フス（４５）「なんだ！？」

フス、椅子から立ち上がる。

社長室の扉を勢いよく開け、社員Ａ入
室。

社員Ａ「社長！ 国じゅうで、機械が暴走し
ています！ 中には人を襲うものも！」

慌てた顔で、息をきらしながら報告。

フス「なんだって？ どういうことだ！ く

そ……娘は無事だろうか！？」

社員Ａ「なんで今娘さんの心配を？ それは
わかりません！ とにかく、社長には緊急
の対応が求められます！」

フス「くそっ！」

○プリマダンケ城下町・住宅街

街は阿鼻叫喚。

騎士たちが、緊急事態に駆り出され、
武器を携え街を駆け回っている。

オパピア「パパは無事……？」

タールク「今はそれを願おう」

オパピア、暴走機械たちをキッと睨み
つける。

オパピア「タールク！ 行くよ！ 自社製品
ならぶっこわしても大丈夫だよね！？」

タールク「ああ、この緊急事態なら大丈夫だ」

オパピアが手を横に構えると、炎が出
現。

それが、長身の炎の銃になる。

タールク「一閃残光・大和撫子」

オパピア「ローゼル・クリティカル・ファイ
ヤアアアアアアアーツ！」

タールクの一閃。オパピアの精密射撃
と、それに似合わない掛け声。

暴走機械たちが、地面に倒れる。

ヨナ「シャーザベスラ！　どうする？」

シャーザベスラ「決まってる。この国を助けるぞ！　ロンリーシャーク！」

シャーザベスラの隣に、水の鮫が出現。

シャーザベスラ「チビィ！　君は僕が守る！

それと……！　ヨナ！　君の精密な動作

が利く氷魔法はこの状況の制圧に向いてる

！　向こうを頼んだぞ！」

ヨナ「わかった！」

ヨナ、走り去る。

チビィの周りに、水のシールドがかたどられていく。

シャーザベスラ「はあっ！」

水の鮫が、暴走機械に噛みつく。

暴走機械、破片を飛び散らせて壊れる。

シャーザベスラ「チビィ！　迷子になるなよ

！」

チビィ「わかってるぜ！」

チビィ、水のバリアの中でぷるんと震える。

○地下牢・牢獄内

地下牢内に、警報が鳴り響いている。

ルチェリールタ「なに、この警報！？」

ニュンリン「脱獄者でも出たんじゃ……」

シャーニューニダ「……」

看守たちが、慌てた様子であちこち動いている。

○プリマダンケ城下町・住宅街

シャーザベスラ「くそ！ 騎士も闘ってるよ
うだけど、これ鎮圧できるのか！？」

○同・住宅街B

オパピアとタールク、暴走機械と戦闘
中。

雷と炎。火花が散る。

オパピア「数が多いわ！ いったいなにが起
こったらこんななるの！」

タールク「わからない！ だが、オパピアは

気を付けた方がいい」

オパピア「なんで？」

タールク「この国の機械はローゼル社製だ。
冤罪をかけられる可能性がある」

オパピア「そんな……！」

タールクがレイピアで暴走機械を斬り
伏せているかたわら、オパピア、攻撃
の手を止める。

オパピア「パパ……」

オパピア、ぼうぜんと立ち尽くす。

タールクM「オパピア……」

○（回想）タールク宅・玄関（朝）

オパピア（5）「こんにちは！」

オパピア、笑顔であいさつをする。

タールク（8）「こんにちは」

オパピア「あそぼう！」

タールクN「オパピアは、底抜けに明るかつ
た」

○同・居間（朝）

2人、お絵描きをして遊んでいる。

オパピア「えへへ！　楽しいね！」

タールク「うん！」

○同・居間

また別の日。

オパピア「ねね、見て見て！」

オパピア、描いた絵をタールクに見せる。

笑顔の2人がいる。描かれている。

オパピア「これあげる！」

オパピア、目をきらきらさせている。

タールク「ありがとう！」

タールクN「私は、オパピアと遊ぶのが楽しかった。でも、オパピアは社長令嬢。いつしか、平民の私と令嬢のオパピアの関わりは薄くなっていった」

○（朝）プリマダンケ騎士団本部・団長室

タールク N「私が宵闇騎士とよばれるようになった頃」

ニコポレルク（35）「タールクには、社長一家の警護にあたってもらおう」

タールク（23）「……はい！」

タールク、笑顔になる。

○ローゼル社・エントランス

タールク、建物の中に入る。

タールク「オパピア……」

オパピアのもとへ駆け寄る。

オパピア（20）「タールク！」

タールク「オパピア……会いたかった」

2人、抱き合う。

タールク「おっと」

タールク、オパピアから離れ、

タールク「宵闇騎士、タールク。これから一

生涯、あなた様にお仕えます」

オパピアに向かって跪く。

オパピア「……うん！　お願いね！」

オパピア、にっこりと笑う。

（回想終わり）

○プリマダンケ城下町・住宅街B

タールク「オパピア……」

オパピア「タールク？」

タールク「あのときの約束。絶対……私がオパピアを守る！」

タールク、目をカッと見開き剣を構える。

剣に雷がまとわれていく。